書評

James J. Bono, Tim Dean, and Ewa Plonowska Ziarek, *A Time for the Humanities: Futurity and the Limits of Autonomy.* Fordham University Press, 2008.

天野恵美理

1. 全体像

本書は、人文学の観点から、未来と、自律性の限界について論じられた論文集であり、12 本の論文から成っている。未来についての緊急の関心事は、変化に向けた実際的なプロジェクトに限られてはいない、というのが本書の主張である。たとえば、昨今、人文学の未来が危ぶまれているが、危機と知るなり即座に、安定的であると思われる科学や技術の領域との関連性をもたせ、そうした企てによって存命を図ろうとするふしがある。しかし、そうした類のものの他にも危機的な未来に対する対応があるのではないか。もちろん、未来に向けての実際的な企てを普く軽んじることはできない。しかし、それらの実際的なプロジェクトはある暗黙と言ってもいいようなルールの上において構築されており、またこれからも構築され続けるものではないだろうか。ルールの上での思考と、ルールそのものへの思考は、別である。未来が危惧されている現状があるとすれば、そのような現在／未来の区別を成り立たせている暗黙のルールに、まずアプローチするべきではないのか。ルールそのものを思考する契機がなければ、危惧されている「未来」は有無を言わさずやがて現実化するだろう。そして、ルールそのものへの思考が可能であるような場は、人文学にほかならない。

このような発想から、本書は人文学（the humanities）の地位を重視し、未来ということの概念的基盤を検討することを目指す。すなわち、未来に対する危機を感じている現状を前にして、まず、たとえば純粋な人文学が廃れて科学技術がますます隆盛をきわめるというような、来るべき危機の具体的内実よりも、そもそも「未来」とは一体どのようなものであって、また、われわれが現に感じている未来への危機感や不安は、未来そのものの性質といかなる関連をもつのかということを考えるようにと促す。未来の観念そのものは予

測不可能な側面をもつが、その側面は、時間そのものの行為能力（agency）に由来していると言うことができ、また、そこにわれわれ主体の他律性（heteronomy）を見ることができると考えられる。その観念からして必然的に表現や思考を阻むような未来の局面に対して、人文学はどのようにアプローチすることができるだろうか。

さて、翻って人文学の現状を見てみると、それは非常に分野融合的であり、学際色に富んでいる。そこで本書は、人文学の真髄をふたたび見極めるべく、美学、政治学、ジェンダー、といったさまざまな人文学的観点から、時間や他律性という根本的テーマへといかにアプローチがなされているかをあらわした論文集である。本書評では、パオラ・マラッティによる、「新しさ」ということについてのドゥルーズの洞察に関する論文（Life and Event: Deleuze on Newness）と、エリザベス・ウィードによる、リュス・イリガライに見るクリティークの困難を扱った論文（Luce Irigaray and the Question of Critique）とを紹介する。

2. “the new in the making”―ドゥルーズの新しさと信じること

2 節では、パオラ・マラッティの論文の概略を述べる。

本論文は、ドゥルーズのベルクソン解釈に基づいて、ドゥルーズが“the new in the making”と呼ぶところのものについて論じたものである。マラッティは映画の分析に沿いつつドゥルーズの思想を説明しており、それが本論文の見所の一つではあるのだが、本書評では、映画についての分析は省き、主にドゥルーズの思想の内容に沿って概略を説明していく。

さて、ドゥルーズによれば、「ベルクソンは、永遠性の問題のかわりに、“the new in the making”の問題を問うことによって哲学を変容させた」(p. 17)というのだが、マラッティによれば、「この主張は、明快であるにもかかわらず、少なからず謎めいている」(ibid.)。そもそも、“the new in the making”とは何か。それを示した上で、本論文は、その概念がわれわれの現代の政治や倫理に対して持つ意義が示されるところで締めくくられている。以下、マラッティの議論を追っていく。

ドゥルーズによれば、ベルクソンの著作は、「全ては与えられていない」という事実を熟考することから成り立っている。ここで、「全ては与えられていない」ということが何を意味しているのかが重要であると、マラッティは主張する。

以下、ドゥルーズのベルクソン解釈を述べていく。ベルクソンは、存在に先行するとされる、可能的なもの（the possible）の観念を、自らの時間概念に反するものとして批判した。ベルクソンによれば、可能的なものの観念とは、所与のものである。つまり、ある出来事がすでに起こってしまった後の時点から、創造や発明があったとされる「そのとき」

に向かって遡及的に投射された、既成事実のコピーに過ぎない。しかし、ベルクソンによれば、時間とは単なる出来事のフレームではない。ベルクソンの時間概念を説明するためにドゥルーズが用いるのは、ヴァーチャルなもの（the virtual）という概念である。ヴァーチャルなものは、可能的なものとはまったく違った仕方で自らを展開する。ヴァーチャリティは、そのたびごとに新たに見出されることによって、現実化する。そして、それを行うもの、そのエージェンシーとなるものこそ、差異のプロセスなのであって、このプロセスによって創造されるものこそが、ドゥルーズのベルクソン解釈における時間なのである。このようにしてなされるヴァーチャリティの現実化は、だから、すでにあったものや予測されたものとの間のいかなる類似性をも帯びてはいない。それどころか、それは未だ存在したこともなければ予見されたこともない、差異の継起的な創造を含意するのである。

このようなプロセスこそが、ドゥルーズ言うところの“the new in the making”である。すなわち、“the new in the making”とは、そのたびごとに差異を構成して、ある出来事を唯一無二の新しいものとし、そうすることによって時間自体を創造するものである。

アメリカ革命やフランス革命、あるいはマルクス主義等に見られる、進歩の観念や目的論の見方は、われわれに「全てが与えられている」ということを信じさせる機能を持つ。しかし、そのように考えることは、人間の出来事にとっての時間は、結局は以前から予定されていたものをその通りに現実化するのみである、というふうに決めつけることになり、また、時間というものが、それ自体で独自の仕方で存在していることを放棄することにもなる。つまり、革命思想においては、予定されていた出来事しか語られないのであるから、時間が実際に展開することによって、予期せずして新たにあらわれるものが度外視されているのである。

「全てが与えられている」と考えることはまた、道徳的、政治的刷新を創造する必要がないということをも、意味することになるだろう。実際、革命的政治をはじめとして、歴史についての考えや信頼によって支えられている政治的行動の典型的なやり方は、「主体」、「共同体」、「人間的行為」、さらには「自然」、「歴史」といったような、一見して明確な所与の概念を利用したものである。革命思想のこうしたあり方が、時間を創造するプロセスとしての“the new in the making”の観念と相容れないことは明らかであろう。

さて、現代においては、革命思想が跋扈した時代とは異なり、われわれはもはや、われわれと世界とを結びつけているリンクの存在を信じなくなったというのが事実である。では現代における“the new”の意義とは何であろうか。上に述べたことの当然の帰結として、われわれは、マルクス主義において共産主義社会がそうであったような、歴史がそれを目

指して展開する目的を見失ってしまったと嘆くべきではない。しかしその一方で、われわれは、世界とのリンクが崩壊してしまった、世界がわれわれにとって失われてしまった、という認識に甘んじることもできないのである。

ドゥルーズによれば、かつての、よりよい未来への革命的な希望に取って代わりうるのは、信念であって、人間と世界とのあいだのリンクは信念のうちにしか回復されることはできないような、不可能なもの（the impossible）である。先に見たように、ベルクソンによれば、「全ては与えられていない」。しかし、全てが与えられていないというまさにそのことのために、何ものも、生の新しいあり方を保証しないし、政治的・社会的組織化（有機化）の他のモードが、虐げられている生を全面的に解放するということを確約してはくれない。だから、ベルクソンが『道徳と宗教の二源泉』において書いているように、存在の他の形式を発見するためには、われわれはまずその来るべきものの価値を信じなければならない。われわれは、そこにおいて“the new”が自らを辿りうる、この世界の価値を信じなければならないのである。「全ては与えられていない」という、非-完備性が、来るべき新しい未来への信念の拠り所となりうること、マラッティによれば、これが“the new in the making”の、現代における意義である。

3. イリガライのクリティークと、クリティークの未来

3 節で述べるのは、エリザベス・ウィードによる論文の概略である。

クリティークに未来はあるか。エリザベス・ウィードによれば、これは一つの難問である。ウィードは、批判的な読みの方法は大きく分けて二通りあるとする。ひとつの方法は、そのテクストが何から目を逸らしているか、何を知るまいとしているか、ということを求めてテクストを尋問することである。今ひとつの方法は、既知のものの領域のうちのいくつかのエリアを探索して、それらを違ったやり方で考え、それらに対して新たな光を投げかけ、そうすることによってそれら既知の対象を詳述し明確化することである。もし二番目の方法が一番目の方法を締め出すほどに軌道に乗ってしまうのであれば、そこには、ある自己満足が定着する危険と、言語と思考への、確固たる信頼がある。しかし、ウィードにとってそのことは問題である。クリティークをするものは、言語や思考の方法自体を無批判的に受け入れてしまってよいのか。それらの方法自体に、批判の目を向ける必要もあるのではないか。言語や思考について、無自覚にある方法をとることによって、気付かれないままにそこから永遠に締め出されてしまうものもありうるのではないか。

筆者は、歴史主義や文化主義と呼ばれるものに、精神分析やラカン派のポスト構造主義

を対置させる。前者は、文化的テクストに付随する周辺的事物、たとえば歴史的背景等は、クリティークによって知られ得る、という考えでもってテクストを読み、何が知られうるか、かれこれの目的のためには何が問題とされるべきか、ということに関心をもっている。つまり、この見方は、テクストという結果のうちに、その原因を入れ込めるものである。これは、先に挙げたクリティークの方法の二番目のものに対応するだろう。それに対して後者、すなわち精神分析やラカン派のポスト構造主義は、あらゆる文化的テクストは、言葉に表せない、創造的な原則を持っているとし、文化的テクストを、そのような現実界と、象徴界とのあいだのギャップの例示として読む。これは、同じくクリティークの方法の一番目のものに対応するだろう。

本節冒頭でも述べたように、ウィードは、クリティークにおける自己満足や言語と思考への確信を危惧している。よって、彼女によれば、ポスト構造主義の衰退がさかんに議論されている今日、クリティークの地位そのものが問題となっていると言える。ウィードはその危うさを、フェミニズムの論客リュス・イリガライを叩き台として論じていく。

イリガライは、一方では、もっともラディカルなフェミニズムの理論家であり、既知とされている事柄を粉砕し、性的差異に関して、未だ考えられていない事柄を挑発することに取り組んでいる。しかし他方では、彼女の著作は、一部の読者によって、本質主義的であるという批判がなされている。

ウィードによればイリガライは、ある緊張関係を保ちつつ、精神分析と接している。精神分析的諸理論は、ともするとエゴや想像力の働きといった、いささか日常生活からは離脱しているようなものにのみ居場所を与えがちだが、ラカンはこうした傾向を矯正する重要なものとして、象徴界を措定した。イリガライもそれに同意している。さらにラカンが既存の現象界のうちにある女性的なものについて行った記述は以下のようなものである。すなわち、女性は、それ自体では存在するものとして指示されることはできない。女性は、自らが欠けているということにおいて、つまり、女性が完備性の否定であるというまさにそのことにおいて、約束として、存在の完備性、全体性というファンタジーを保証しているからである。イリガライは、ラカンのこの記述についても完全に同意しているのである。彼女がラカンと袂を分かつのは、ラカンによるこの記述の公式化と、それによる象徴界の維持においてである。彼女にとってこの公式化は、結局、存在するものすなわち男性と、存在しないものすなわち女性との、二極分化の状況をつくることになるのであり、ラカン派の精神分析的言説は、女性はそれ自体では存在するものとして指示されることはできないという、その言説自身の背景となっているような歴史的要素を検討しないことで、象徴

界の秩序を維持してしまっているというのである。すなわち、イリガライによれば、ラカンは自らの言説に対して、本節冒頭で挙げたクリティークの方法のうちの二番目のものとしてのクリティークを怠っているというのである。

そのようにラカンを批判した上で、彼女は、ある異なる性的差異ができたときにのみ、社会的・政治的変化が訪れると、徹頭徹尾、一貫して主張している。最近では彼女は、現存する男根主義的な文化とは違う、ふたつの異なる主体のあいだの関係性が生じている文化をわれわれが持つより前に、思考の地平は変わらねばならないと書いている。

こうして、イリガライは、その主張のラディカルさゆえに、自らの主張を、ラカンとくらべて行き過ぎたものとしてしまうことになる。彼女は前期の著作においては西洋文化を見事に脱構築してみせたが、後期の著作では、象徴界の現状とは異なっているが、しかし来るべきものとしての、新たな性的差異を明確に記述・公式化することによって、彼女がラカンを批判したのとは別の仕方でではあるにせよ、クリティークを受け入れない、自らの固定的な観点に陥ってしまい、多くの脱構築的な成果が隠されてしまった。ウィードによればイリガライは、本節冒頭で挙げたクリティークの方法の前者から後者へと、無自覚に移行してしまったのである。

イリガライの著作をクリティークとして読む者は、困難の挙げ句、全体的で完全な主体を表象することは、ナンセンスに終わらざるを得ないとするラカンの言説に回帰せざるを得ない。ウィードによれば、このような困難は、イリガライだけでなく、挑戦的なクリティークにおいて一般に見受けられるものである。

ポスト構造主義の衰退が謳われる今日、現状をただ是認するのでもなく、現状と異なった理想的状態を標榜するのでもない、という、二重の意味でクリティカルな態度、すなわち、あえて不可知なものの指示に留まる批評が、なお求められると、ウィードは主張する。

4. 論評

１節でも述べたように、本論文集は、トピックスの多様性にもかかわらず、一貫して、時間とか、他律性といったテーマを追っている。読者は、時間や他律性といった哲学的主要テーマへと直接にアプローチすることによって、同時に、ベルクソンの思想と精神分析とにおいてともに見られる未来の位置づけ方というような、各トピックスのあいだにおける、深いレベルでの類似性を見ることができる。それは欠如への感受性についての類似と言えるだろう。

人文学の特徴は、ある種の絶対性の欠如がもたらすものだと言えよう。言葉にならない

ものを、しかし何か汲み取ってアカデミックな表現をしたいと望む者にとっては、本書によって、欠如や不可知なものへの感受性を、言葉や学問の知へと還元するための手がかりが与えられるのではないだろうか。

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕